

チェルノブイリの回想

ヴィクトル・パーヴロヴィチ・ガイダク

竹内高明 訳



1940年5月23日生まれ。ウクライナ人。大卒、機械技師の免状あり。1962年より1991年までソ連共産党員。1970年より1995年までチェルノブイリ原発建設局勤務。現在、1級障害者で年金生活。すべての疾病について、1986年から1995年まで携わったチェルノブイリ原発事故の事後処理作業との関連が認定されている。

キエフのゼムリヤキ事務所にて、2006年9月

私の人生は、ソ連の一構成国であるウクライナ共和国に住んでいた他の多くのウクライナ人たちの人生と何ら異なるものではなかった。キエフ州チェルノブイリ市に私の家族が引っ越したのは、父パーヴェル・イヴァーノヴィチがチェルノブイリ地区の主任畜産技手に任命され、派遣されたことによるものだった。父は、1972年に退職し年金生活に入るまでこの役職を務めていた。家族は4人だった。父、獣医だった母ヴァレンティーナ・ヴァシーリエヴナ、のちチェルニゴフ地区主任獣医監督官となり、1986年から1994年まで、ウクルエネルゴ防疫社の作業監督だった兄レオニードと私である。レオニードは、チェルノブイリ事故の事故処理作業との関連を認められた障害者資格を取得し、年金生活に入った後、1996年に亡くなった。

一家は1949年チェルニゴフ市に移り、1957年、私はチェルニゴフ市第1中等教育学校での10年間の教育課程を修了した。卒業後、自動車・トラクターステーションで、掘削機運転助手、掘削機運転手、トラクター班班長として働いた。私の知識と、組立工・旋盤工・電気溶接工・ガス溶接工・電気機械工の技能を持っていたことが、コムソモールの筋で尊敬を集めるようになり、私はほとんど絶え間なく表彰状、報奨金、高価な賞品を与えられるようになった。19歳になって、私はソ連軍での兵役義務を果たすため大学での学業を断念し、軍で4年間を勤め上げた。除隊後私は大学に入り、1968年に卒業して、機械技師の免状を得た。卒業後の就職指定制度によって、ヴォロダルスク地区の農業機械整備工場の技師として就職し、1年後には主任技師に昇進した。

その頃、両親は年齢を重ね、父は第二次世界大戦に参戦した折に受けたいくつかの深い傷の後遺症で苦しむようになっていた。兄のレオニードは、当時アムール州で獣医として働いていた。一方、新聞やラジオで、チェルノブイリ市から16kmのところ原子力発電所が、またその職員の住む町が造

られるという報道が流れた。原発の予定地となったのは、非常に美しい場所だった。西には松林と、1916年に造られた幹線道路。プリピャチ川の対岸には、オヴルチ市とチェルニゴフ市をつなぐ鉄道の支線が走り、その橋がプリピャチ川とドニエプル川に架かっていた。プリピャチ川には当時船が走っており、黒海からチェルノブイリ市までは川と海の両者を走る船が運行していたし、さらにその上流には、ポーランドまで鉄鉱石を運ぶ川船が通っていた。原発建設地の選択にあたって、まず第一に考慮されたのは、鉄道や水上交通、道路の利便が整っていることだった。また、周辺の土地は農業にはほとんど適さないものだった。砂地で、大量の有機肥料や化学肥料を施す必要があったし、収穫率は一般に低かったからである。

両親の度重なる依頼を受けて、私はそれまでの仕事を辞め、まだ始まったばかりのチェルノブイリ原発の建設現場で、自動車部の修理班長の職についた(その頃、自動車部で機械技師の仕事はまだなく、1971年からその職務ができる予定だった)。

就職後3ヶ月たって、自動車部の部長は配置換えになり、私が後任の部長に任命された。仕事はきわめて多く、それに伴う困難もまた多かった。車両は野天に駐められており、事務所を含む作業場の建屋もまだできていなかった。車のタイプも、構造も旧式のものだった。運転手たちは住居がないため、周辺の村に住んでいて、勤務に遅刻するのが常であった。これら一連の問題に直面した私は、1年の間にそれらをほぼ解決することができた。自動車部の物資上の基盤を築き、新式の車両を多く調達し、運転手たちにベラルーシ自動車工場・クレメンチュク自動車工場・ミンスク自動車工場製の車両、またクレーン車・コンクリート運搬車・コンクリートポンプ車などの特殊車両の運転の研修を受けさせることができた。原発本体の建設が始まるとともに、建設作業部門とその関連の施設、のちにプリピャチと呼ばれることになった原発職員の町の建設が行われた。困難や問題は山のようにあったが、我々は昼夜兼行で休日もなしに、精根尽きるまで働き、多くの問題は克服され、解消されていっ



チェルノブイリ原発・車両部隊、1972年

た。

1971年、プリピャチ市で最初の集合住宅が完成し、私の家族はそこにアパートを支給された。当時、私の家族は4人になっていた。妻、イーゴリとヤロスラフという2人の息子と私である。妻も、チェルノブイリ原発建設局で働いていた。

1977年、チェルノブイリ原発の1号炉が完成し、原発職員たちによる運転が始まった。1号炉の運転開始後、平和利用の原子力の時代の到来を告げるその他の原子炉が次々に完成していった。チェルノブイリ原発はRBMK-1000型原子炉[チャンネル型大出力炉]用に設計されていたが、この炉は単独回路、つまり炉心で発生した「よごれた」(放射性的)蒸気がそのままタービンを回すという構造だった。100万kW級の大出力の原発が、国の統一送電網に接続されているという状態で、1日あたり、十分な検討の結果とはいえないほどの負荷が1号炉にはかかっており、その結果、安全弁が作動して、100気圧またはそれ以上の気圧の蒸気が放出されるのだった。放出時の轟音は、周囲何kmにもわたって鳴り響いた。「よごれた」蒸気は、後続の原子炉の建設現場で働いている労働者たちや、原発建屋から2kmのところにあるプリピャチの住民たちに、また近辺のチェルノブイリ地区の町村の住民たちに害を及ぼしたであろう。だが当時、新聞やラジオ、テレビでは、ソ連の原発の安全性について、大々的なプロパガンダが行われていた。

その頃、我々はまだ若く、栄養も行き届いており、原発職員用の新しい機器を備えた保健室もあったので、体の不調をそれほど感じず、気にもとめなかったのかもしれない。建設局のある部署で、カロリーという兄弟が電気溶接工として働いていた。彼らは双子の姉妹と結婚し、幸せな若夫婦の家庭を築いており、そのことがTV番組にもなったことがあった。やがて、使用済み核燃料貯蔵所で配管の破断事故が起こり、その修理にカロリー兄弟があたることになった。破断は修復されたが、兄弟はやがて30歳にもならぬ若さで亡くなった。だが、同僚のうち、不満をもらしたものは誰もいなかった。皆快適なアパートをあてがわれていたし、給料もよく、プリピャチの住民は、当時キエフ州北部の他の町村では手に入らなかった食品その他の商品、自動車、家具などを供給されていたのである。

1986年、チェルノブイリ市で個人住宅に住んでいた母が、頻繁に病気に罹り始めた。父は1977年に亡くなり、チェルノブイリ市に葬られていた。それで私は、一人暮らしになった母のところに、プリピャチからたびたび通っていた。母の生活にはさまざまな問題があったが、私の助力によってそれらは無事に解決された。

1986年当時、私は原発の建設現場に船や車で運び込まれる貨物を扱う貨物積下し場の主任と、操車用ディーゼル機関車・引込み線路・機関車班・配車部・線路班・クレーン車などを管轄する鉄道担当部局の主任を兼ねていた。4月26日は、キリスト教の重要な祝日である復活祭の前日であり、25日、私たちは母の家で、掃除をするなどしてその準備を整えていた。準備が終わったのは夜12時頃だった。私の職場の勤務は24時間体制であったため、私は26日午前5時に職場に向かった。4号炉から400m離れた鉄道担当部局の配車部に着くと、配車係のスヴェトラーナが、深夜1時50分頃[原文のママ]に原発で2度爆発が起こったこと、彼女が車で爆発音の方向へ走り、巨大な破壊の跡を目にしたことを私に報告した。この時、外はもうかなり明るくなっており、配車室からは原発の建物がよく見え、4号炉はちょうど真向かいにあった。そこらじゅうが煙で煤けており、ケーブルのゴムが焼ける

臭いが、鼻や胸を文字通り突き刺すようであった。だが炎の名残りは見えなかった。4号炉の機関室は破壊をまぬかれていたが、原子炉部分は、地上10mより上の部分が破壊されていた。建屋に空いた穴の中には、鉄筋や柱、大梁がぶら下がっており、鉄筋コンクリートの床や天井は折れてばらばらになっていた。

私は電話で中央配車管理部と連絡を取り、状況を確認しようとしたが、答えるものは誰もおらず、原発の作業員とも連絡は取れず、電話が通じた者は、本質的なことは何も教えてくれなかった。軍人たちを乗せた車両が到着し始めた。私は、何か非常事態が発生した時には必ず派遣される封鎖部隊だろうと判断した。1986年末には5号炉と6号炉が完成する予定になっており、私はそれまでほとんど休みなしに働いていた。それで私は、配車係に、私がどこにいるか、必要な時にはどこを捜せばよいかを知らせた後、プリピャチに戻った。この日は土曜日であり、私の帰宅までにすでに何度か、休日と一緒に過ごそうという電話が友人たちからかかってくる。食べ物や飲み物などはすべて用意済みだということだった。私もその気になり、一緒に行くことにした。

我々はプリピャチの第1地区にあった私のアパートの前に集まり、家内たちを刺激しないように、林の中の非常に美しく快適な場所にあったダンス場に行って、ピクニックを始めた。原発での事故についても話が出、原発職員の連中は、こういうへまをやらかしたというので誰かがお褒めをいただけなくなるくらいのことだろうが、建設労働者の俺たちは、いずれにせよ爆発の後片付けをし、壊れた箇所の修復をするんだ、というぼやきもあった。私が家に帰ったのは午後7時頃で、その時にはもう私に呼び出しがかかっていた。私は事故対策本部に行き、「鉄道関係者と話をつけて、建設現場に来るすべての貨物列車は、運搬路に入れず、最寄りの駅で待機させること」との指令を受けた。この指令を実行するのにたっぷり1昼夜かかった。川を通して運ばれてくる貨物についても同じ指令が出された。

4月27日、プリピャチ市から避難が行われ、私は自分の家族をチェルノブイリ市の母の家に行かせた。この時にはすでに、砂を袋に詰めて、緊急に派遣されたヘリコプターに載せるようにという指令が発せられていた。チェルノブイリ原発建設局と原発の指導部には、何らかの決定を下す権限がなく、すべての問題を解決できるのはただモスクワのみであって、ウクライナ共和国政府にもその権利はなかった。

事故直後の数日は皆ショック状態にあり、何らかの筋道立った決定を下せるものは誰もいなかった。その後、チェルノブイリ市に科学者、設計者、各省庁の代表者が集まり、ソ連閣僚会議副議長の一人の指揮の下に対策本部が組織されてからは、事故処理作業は自覚的に計画された方針にのっとり、整然としたメカニズムに基づいて行われるようになった。まず最初に設定された課題は、十月革命の記念日までに惨事の後片付けをし、設備を更新して、11月7日には4号炉の運転を再開するということだった！ ソ連政府とタス通信が、チェルノブイリ原発事故についての情報を国際社会に公開することを遅らせていたのは、そのためだったのかもしれない。しかし、私はその頃憂鬱にとらわれていた。5月7日、チェルノブイリ市の避難が行われ、私の家族と母はキエフ州の他の村に移動した。母はストレスで神経を昂ぶらせたため、脳卒中を起こし、意識を取り戻すことなく亡くなって、5月9日キエフ州ブロヴァリ地区のリトキ村に葬られた。当時のパニック状態の中で、母の遺体をチェルノブイリ市に運び、父と同じ墓地に葬ることは許されなかった。ウクルエネルゴ防疫社の作業監督とし

て、チェルノブイリ事故の事後処理作業に携わるため、兄のレオニードも現地にやってきた。

事故処理作業にあたって、我々は事故対策本部のあるチェルノブイリ市で寝泊りしていた。事故処理作業は何年も続いた。我々はまず石棺の建設を始めたが、その作業が中規模機械工業省第 605 建設局の管轄となった後は、原発そのもので機器の整備を行い、建屋の除染その他必要な一連の作業を行った。すべての監督者同様、私は 5 日勤務・2 日休みという体制で働いていたが、実際には通常の休みは 1 日であり、また何ヶ月も休みなしの時もあった。食事はいつも決まりきったものだったため、我々は危険を知りつつも、チェルノブイリ市では豊富にあった野菜や果物を食べていた。郊外では採り放題だった、魚や野生動物の肉も。内部被曝測定装置は体内の食物に反応したが、我々はそれに慣れっこになっていた。建設作業員はみな、出来高払いの俸給システムで働いており、そのため放射線安全規定に違反して働くことにもなったのだった。その他の事故処理作業員たちは、すべて時間給を支給されていた。

避難させられた我々の家族は裸同然で、必要なものすべてを失っていた。我々の財産はみなプリピャチに残っており、それを運び出すこと、まして使用することは禁止されていたし、危険でもあった。そういうわけで、建設作業員たちにとって、放射線安全規定に違反するのはいつものことであり、我々監督もその事情を理解していた。家族は生活の糧に苦しんでおり、少しでも稼がなければならないのだ。

汚染の状況も、汚染地域で働けなくなる被曝値の上限も知っていた私は、被曝線量積算計をアパートに残して原発に行き、ニセモノの積算計をつけて作業の監督と組織を行ったが、それは私のランクの他の監督たちもやっていることだった。

3 号炉の運転も、我々によって 1986 年中に再開された。86 年 10 月 10 日、原発職員がショック状態に陥ったのが原因で、2 号炉で火事が発生した。その結果、あやうく機関室の屋根が崩落しかねないところだった。

スラヴチチ市を建設するという決定は誤っていた。ヴィシゴロド[訳注：キエフ市北郊の町、事故後は放射線管理強化区域に属する]を拡張し、原発まで直通の鉄道の支線を引いた方がずっとよかつただろう。チェルノブイリ原発の職員たちは皆、すでにキエフでアパートを支給されていたため、スラヴチチへの転居を拒んだだけでなく、何の未練もなく原発での仕事を辞めてしまった。その結果、チェルノブイリ原発の 3 号炉を運転することになったのは、過去にその経験を持たない、スラヴチチ市の建設作業を行った者たちだった。

チェルノブイリ原発の運転を停止するというウクライナ政府の決定は、全く正しかったし、遅まきですらあったと私は思う。3 号炉でも事故が起きたかもしれないからだ。石棺には燃料のウランが残っているし、その他もろもろの問題が未解決のままである。その一部はでっち上げられたものではあるが。一群の人々、いや、無数の団体が出現して、チェルノブイリの問題を永遠に続くものとしてしまった。彼らにとって、チェルノブイリの問題は仕事、金、役職、その他のものを意味しているのだ。彼らによって、絶えず多くの資金、そして多くの時間、無限の期間が要求される。破壊された 4 号炉の中には燃料が残り、金属やウランが溶け、蒸発さえており、そのことは原発上の光のスペクトルの観察によっても裏付けられている。発生した高温のため、それらは大気圏の高みにまで巻き上げら

れ、風向きが変わることによってさらにヨーロッパ全域に運ばれ、地球を数回転したのである。

新しい石棺を造るのでなく、現存の石棺内にコンクリートを流し込まなければならない。科学と人類が「平和利用の原子力」と闘うすべを身につけたあかつきに、そのコンクリートの塊を分解して、危険な残留物を処分することができるだろう。

1988年、私は高血圧症になって危険な状態が続き、その後次々と、それまでに罹ったことのない他の病気もあらわれてきた。そのため、キエフのさまざまな医療施設で検査と治療を受けることになったが、病状は好転しなかった。虚血性心疾患が進行し、その結果心筋梗塞の発作が2度起こった。

1992年、私は2級障害者の認定を受けたが、退職し年金生活に入ったのは、1995年、後任を育て上げてからのことだった。2003年、胃ガンが発見された。手術代は非常に高額であり、家族と親戚の貯金すべてが消えたばかりか、貴重品や財産を売り払わなければならなかった。国も、市民団体も、この件に関して援助は一切してくれなかった。

そして今、私は外来病院、薬局、入院病棟という三角形の上を移動し続けている。法律では無料ということになっているにもかかわらず、医薬品は自費で購入する。国は年々チェルノブイリ被災者の特典を廃止していき、残っているものに対しても予算が出ない。市民団体「ゼムリャキ」を通じて医薬品その他の支援をしてくれている、日本国民の皆さんと日本政府に感謝したい。同僚だった建設作業員たちの運命も、私と比べてましというわけではない。私と同じランクの監督だった者たちの70%はすでに永遠の休息に入っており、生き残った者たちもやつれた姿で、彼らを明るい将来が待っているとはいえない。私のアパートや、移住してきた他の原発建設労働者たちのアパートに今も住んでいるのは主に未亡人たちであり、運命は彼女らをも甘やかしてはおらず、そのほとんどが2級または1級の障害者である。アパートの同じ入り口から入っていく36世帯のうち、男性が生き残っているのは9～12世帯であり、その彼らもすでに^{ますらお}丈夫の名には値しないのである。

家族について。私たちの運命も他の被災者とさして変わらない。財産はすべてプリピャチに置き去りになった。国際社会が被災者のための支援金を振り込んだ口座番号904の特別口座[訳注：ソ連国立銀行に特別に開設された、被災者への支援金を受け付けるための口座]からは、何も受け取らなかった。私腹を肥やしたのは政府と官僚だけである。1994年、ウクライナの通貨はルーブリからクーポンに移行し、事故処理作業で得た給与を含むすべての貯金は消えてしまった。権力を持った輩のために都合よくしつらえられた民営化が始まった。国の重要な企業、工場、建物、施設、その他すべてが民営化され、我々に残されたものはバウチャーだけだった。今となっては、旧ソ連のルーブリ同様の紙切れに過ぎないそれを、私は孫たちのために保存している。

子どもたちもそれぞれ結婚し、家族は大きくなった。チェルノブイリ事故などの問題で、上の2人の息子は大学には行けなかった。2人とも結婚しているのだが、自分の住居を購入することができず、その見込みもない。一番下の息子であるコーリャ[訳注：ニコライの愛称]は大学に通っているが、学費有料のコースであり、金持ちの子弟はなぜか学費免除のコースで勉強している。娘のアラの家族は、自分たちのアパートを持っておらず、孫娘も私の世帯に登録されている。もし健康であれば、私も働いて子どもたちの助けになったろうが、その健康はチェルノブイリ事故に奪われてしまった。

しかし、何が起ころうとも、人類の進むべき道とその未来はやはり原子力あるいは熱核反応エネルギーとともにあるのであり、この事実は動かせない。国際社会の努力をこの方向に結集しなければならないし、それも早ければ早いほどよい。

電力や集中暖房を、蒸気を発生させることなく得る方法を見出さなければならない[訳注：旧ソ連諸国では、発電と同時に集中暖房のスチームや湯の供給も行う熱電力供給施設がある]。IAEAは、個々の原子炉の出力を世界中で制限しなければならない。もし、チェルノブイリ原発とその4号炉の出力が10分の1であれば、事故処理作業もごく敏速に進み、その影響も、人々に与える害も少なくなっているだろう。

エコロジーの面から見れば、大出力の原発は多量の熱を発生させるが、それは実質上合理的に使われることなく、環境に悪影響を及ぼしている。冷却水用の貯水池や冷却塔から、大量の熱と蒸気が環境中に放出され、近隣地区の天候を変化させ、結果として人間にも影響を与える。

原発は、特定の都市とその住民・産業のために設計されるべきであり、発生する熱は冬季の暖房や、年間を通じて野菜を栽培する企業のために用いられるべきである。

我々は、まだしも運がよかったのである。チェルノブイリ第2原発は、出力150万kWの原子炉4基を備えて建設される予定だった。このような巨大原発で同様の事故が起こったら、どうなっていただろう??? 災害はヨーロッパにとどまらず、アジアにも及んでいたにちがいない。

今日、国際社会は、すべての核兵器とその運搬手段を廃絶することの必要を理解し、そのために団結しなければならない。

核兵器の脅威にじかに接した国民は、その恐るべき危険性が被災地だけにとどまるのではなく、影響が将来の世代にも及ぶということをつとに理解しており、その再現を許さないために全力を尽くしている。ウクライナもまた、平和利用の原子力の危険性について、それが兵器ではないにもかかわらず、犠牲者を哀れむことも選ぶこともせずに、仮借なく多くの命を奪っていくのだということを理解している。

各国民は、人々は、核の問題に対して団結し、一体となって立ち向かわなければならない。そうすれば、将来の課題の解決は見出されるだろうし、また必ずや解決が訪れるであろう。

2006年6月27日

(サイン)

ガイダク

もしあの事故が再び起こり、私にどうするかを決断が迫られるとしよう。その場合、私はふだんよりは長く考えるかもしれないが、それにもかかわらず現地に入り、己れを犠牲として、自らの市民としての義務、そして職業的義務を果たすことだろう。私を取り巻くすべての者たちのために!!!

※ 本稿は「世界」2007年4月号に掲載された。